

患者支援 中長期的に



東日本大震災

中区の診療所で医師が現地報告

東日本大震災の医療救護班として宮城県塩釜市などに派遣された浜松佐藤町診療所（浜松市中区）の齋藤友治所長（四も）の現地報告会が四日、同診療所であった。被災者には感染症が広まり、精神的ショックを受けた患者も多く、齋藤所長は「中長期的な支援が必要」と呼び掛けた。

全日本民主医療機関連合会の要請で、三十一日から三日まで塩釜市の総合病院と、多賀城市の避難所で治療に

看護師や職員らに被災地の現状を説明する齋藤所長も（浜松市中区の浜松佐藤町診療所で）

感染症多く、薬も不足

あたった。齋藤所長は「インフルエンザや嘔吐下痢症などの感染症患者が多く、慢性疾患患者への薬も不足していた」と説明した。体育館のような避難所では暖房効率も悪く、空気も乾燥気味。下水道が復旧できず、汚物がマンホールからあふれ出るなど、施設の衛生管理が課題と指摘した。

十九日から二十四日まで現地入りした「みかん薬局」（浜北区）の黒宮潔店長（五も）も出席し、「二日で六百人以上から八百人を超える患者が訪れて大変な状況だった」と振り返った。多くの薬剤が届けられていたが「使えないものもあり、現場の要望を聞いてから送るべきだ」と話した。